

ボランティアのすすめ

例年になく暖かい冬を迎えています。肌で感じる空気の冷たさや、日の暮れ方、道行く人の足の運び、私たちは様々な無意識の感覚の中で、月日の移り変わりを感じとっているものです。もう師走も半ばを過ぎました。時間の流れとともに、人は多くのことを忘れていきがちですが、記憶にとどめておかなければいけない事柄もたくさんあります。

災害にあった人々は、この冬をどう乗り越えるのでしょうか。
新潟県中越地方には今でも、ボランティアに参加する方が絶えないといえます。

以下に、災害救援ボランティアに参加した方のレポートを載せます

印象に残った体験の一つに、戸口訪問で現地のニーズ調査を行ったことがあげられます。現地の人との交流を通して、震災が皆の心に大きな不安を与えているのを感じました。新潟は夏にも洪水の被害に見舞われましたが、震災はそれとはまた違う恐ろしさがあります。

今回訪問した家庭でよく耳にしたことは、「近いうちに大きな地震がまた来る」という噂です。このように、この避難生活がいつまで続くのかという不安が、震災にはつきまとうのです。そんな中で、被災地の方々にどう声をかけて励ましてあげればよいのだろうと悩みました。

しかし、そうした不安を抱えながらも、地域の人々はできるだけ明るくつとめ、互いに助け合って乗り越えようとしていました。震災当日ですら、野菜や米を皆で持ちよって、自分達で炊き出しをしたり、布団を集めたりしたそうです。避難所でも、お年寄りや子供達を労る姿が随所で見られました。「家族のような関係をつくる」ことに、どのような環境下でも心に平和を作るヒントがあると感じました。

(23歳 社会人)

11月、とある日の天声人語より

被災地へのお見舞いとしては異色かもしれない。新潟県出身の作家新井満さんが地震に襲われた故郷の人たちに、義援金とは別にカーネーション千本を贈った。

阪神大震災のときの見聞から思いついた。知人が、買えるだけのペットボトルの水とともにチューリップを携えて現地入りした。水を受け取る被災者はどちらかといえば無表情だった。チューリップを見ると表情が変わった。ほほえむ人、涙を流す人、いろいろだったという。

「いのち、ということだと思うのです。」と新井さんは言う。犠牲になった人々のことや生き延びた自分のことを皆考えている。落ち込んでいる人もいるだろう。そんなとき「けなげに咲いている小さないのちを見てはっとする。生きる希望が新たにわいてくるかもしれない。そうしたきっかけになってくれれば嬉しい。」

新井さんは高校3年のとき新潟地震を経験した。教室では赤白のチョークが宙を飛び、無数のガラス片が降り注ぎ、校舎は壊れた。信濃川にかかる近くの昭和大桥も崩落した。自宅も全壊だった。「いまでも思い出したくない経験だ。」

大学に入ってすぐ、大病を患い生死の境をさまよった。「遅れてやってきた地震の後遺症だと思う。」

被災者としての経験から、こんどの地震についても「これからが大変だと思う。緊張が緩み、世の中の関心も薄れていくこれからです。」

2004年は、台風・地震など多くの自然災害がありました。ともすると、私たちはそれに「慣れて」しまって、またあったという感覚になってはいないでしょうか？ 溢れる情報の中で、その一つ一つを自分に引き付けてとらえる努力をしないと、他人事として受け流す風潮がある気もします。ある意味、それは災害が続くことと同じくらいに恐ろしい、と言えるのかもしれない。

お 知 ら せ

白寿荘(特別養護老人ホーム)ボランティア 募集

日時 : 平成17年1月15日(土)

13時15分に1階事務所前 集合

全員で向かい、2時から活動を開始します。4時半終了予定です。

場所 : 白寿荘 目黒区大橋

交通手段 : 井の頭線駒場東大前下車、徒歩10分

内容 : 清掃、および入居されている方々との交流

参加を希望する生徒は、1月8日(土)始業式当日 に、ボランティア部顧問 広田(マ)先生に申し出ること。